

日本最大規模の研究所群

研究所・教育研究施設

研究所が大学院教育に果たす役割

京都大学には、我が国の学術研究の中核的研究拠点として各学術分野を牽引する14の附置研究所が設置されています。これらの研究所は、基本的には研究面の活動を主体としていますが、大学院研究科との協力の下、最先端の研究環境を活かして優れた若手研究者の養成に取り組んでいます（協力講座）。

各研究所において大学院学生として教育を受けることを希望される場合は、それぞれの協力講座を開講している大学院研究科に問い合わせ、受入状況をご確認ください。

P74 ● 化学研究所

P75 ● 人文科学研究所 / 再生医科学研究所

P76 ● エネルギー理工学研究所 / 生存圏研究所

P77 ● 防災研究所 / 基礎物理学研究所

P78 ● ウイルス研究所 / 経済研究所

P79 ● 数理解析研究所 / 原子炉実験所

P80 ● 霊長類研究所 / 東南アジア研究所

P81 ● iPS細胞研究所 / 教育研究施設

P82 ● 教育研究施設 / 協力講座一覧

化学研究所

INSTITUTE FOR
CHEMICAL RESEARCH



http://www.kuicr.kyoto-u.ac.jp/index_J.html

研究

化学研究所(以下、化研)は、化学を物質研究の広い領域として捉え、物質に関する真理を究明するとともに、時代が求める諸課題の解決にも資する研究を行っています。このような立場で2010年度から、「化学関連分野の深化・連携を基軸とする先端・学際研究拠点」として他大学・研究機関と多彩な共同利用・共同研究を推進し、一方、国内3大学と「統合物質創製化学推進事業」による研究連携を密にしています。また、2007年度から3年間公募されたグローバルCOEプログラムには化学系、物理系で採択された3件の拠点到中核部局の一つとして、さらに同年度開始の「世界トップレベル国際研究拠点形成促進プログラム・iCeMS」にも、積極的に参画しています。

化研の高い研究活性は、広い化学関連分野をカバーする32の研究室(研究領域)が進めてきた先鋭的基礎研究、研究室相互や他部局・他研究機関と推進してきた学際・融合研究を反映しています。また、化研では海外研究機関との部局間交流協定(現在57件)などに基づく人的交流も盛んで、世界でも化学関連分野の先端研究の一つの核となっています。

教育

化研の32の研究室は、理学、工学、農学、薬学、医学、情報学、人間・環境学の7研究科12専攻にわたる「協力講座」となっていて、約210名の大学院生(うち外国人留学生約30名)のきめ細かい指導に当たり、広い視野を持つ世界トップレベルの研究者の育成に努めています。その一環として、研究室や研究室をまたぐセミナーなどに加え、化研の大学院生が分野を越えて互いの研究内容を認識・参照する場としての大学院生研究発表会、化研全体の年次報告に当たる研究発表会を毎年開き、また、招へい外国人研究者との意見交換・交流の場であるセミナーやシンポジウムも多数(2011年度は38回)開催しています。さらに、やはり化研を挙げての事業として、大学院生に対して、国際会議での研究発表のための短期海外渡航を奨励するとともに、研究滞在を目的とする中長期海外派遣も力強く支援しています(2011年度は、それぞれ38件、10件)。

梶弘典教授
(分子材料化学研究領域)



化学研究所は、新入生歓迎会、涼飲会、化研発表会、院生発表会などをはじめとした、研究のみにとどまらない様々な研究室間の交流があり、普通には見られないくらい一体感のある組織です。このような環境では必然的に研究室間の垣根が低くなり、装置の共通利用や共同研究が日々行われています。また、様々な先端的大型設備を保有し利用できることも、化研ならではの長所といえるでしょう。我々の研究室では、近い将来、ディスプレイや照明への本格的な実用化が期待されている有機エレクトロルミネッセンス(有機EL)や、有機太陽電池に関する研究を進めています。研究を進めるに当たって、分野融合的な展開がどうしても必要となるのですが、例えば村田靖次郎研究室との共同研究や、京大の中で最も磁場の高い最新のNMR装置、最新のスーパーコンピュータの利用により、先駆的な研究が可能となっています。化研の建物はごく最近、耐震の工事が施され、安全で快適な環境が整っています。みなさんも、このような環境で最先端の研究に携わってみませんか？

人文科学研究所

INSTITUTE FOR
RESEARCH IN HUMANITIES



<http://www.zinbun.kyoto-u.ac.jp/>

研究

人文科学研究所は、人文社会系の大学附置研究所としては国内最大規模のもので、現在は文化研究創成、文化生成、文化連関、文化表象、文化構成の五研究部門と、東アジア人情報学研究センター、現代中国研究センター、人文学国際研究センターの三附属研究施設から構成されています。人文科学研究所は人文科学分野において学際的共同研究の手法をいち早く取り入れました。現在も28の共同研究班において、「複雑化・多様化しつつある現代社会において、人文科学が果たす役割は何か」という問題を多様な角度から探究しています。2010年度からは文部科学省の認定による共同利用・共同研究拠点「人文学諸領域の複合的共同研究国際拠点」として、課題を公募する共同研究などの活動を推進しています。

教育

人文科学研究所は、次世代の研究者を育成する教育活動にさまざまなかたちで力を注いでいます。

- 全研究部門および附属研究施設から25名の教員が、文学研究科の協力講座において大学院教育にあたっています。また、協力講座に準ずるかたちで教育学研究科人間・環境学研究科(共生文明学専攻文化人類学)、アジア・アフリカ地域研究研究科において講義と学生指導を担当しています。
- 地球環境学堂・学舎においては、「両任制」流動教員(1名)を務めています。
- これら以外にも、文学研究科や経済学研究科において、大学院授業担当のかたちで多数の教員が教育にあたっています。
- さらに特筆すべきは、学内外の博士後期課程以上の学生を共同研究班員として受け入れ、実践的研究活動に参加する機会を提供していることです。領域を異にする多数の専門研究者が参加する共同研究の場を通じて、精緻な文献研究、フィールドワークなど、多様な研究手法と学際的視野をもつ若手研究者を養成することに努めています。また、ポスドク研究者を研修員などとして受け入れ、活躍の機会を提供しています。

田中 雅一教授
(文化研究創生研究部門)



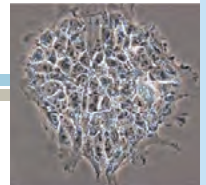
私の専門である文化人類学は、フィールドワーク(FW)という方法で他者の生について研究する学問です。人類学のFWでは、一人と同じところに長期で住み込むことが期待されています。当然失敗することもあるでしょう。しかし、大事なことは、みなさんがフィールドで経験するさまざまな疑問に向き合っており、その答えを見つけようとする努力です。文化人類学にはこれまで積み重ねてきた多くの疑問があります。そうした疑問を学ばないと、そもそもフィールドで疑問に出会えません。このような疑問の学習や回答への模索は、人類学に限らず学問一般にも当てはまることです。学問とは、世界についての疑問と回答からなる知の集大成だからです。人文科学研究所の主たる活動である共同研究は、既存の疑問や回答をめぐって議論する最適な機会を大学院生に提供しています。FWだけでなく共同研究を通じてわたしたちは鍛えられ、一人前の研究者になるのです。

支援について

研究科の紹介

再生医科学研究所

INSTITUTE FOR
FRONTIER MEDICAL SCIENCES



<http://www.frontier.kyoto-u.ac.jp/>

研究

再生医科学研究所は、我が国初の「再生医科学」を冠した研究所として設立され、現在、5研究部門、2附属施設からなる27研究室で構成されています。現在、研究所で行われている研究には、大きく分けて①ヒトES細胞、iPS細胞、体性幹細胞等を使用した幹細胞研究②神経・筋・骨・血液など再生医学の主な標的となる組織の発生・再生機構に関する医科学基盤研究③自己組織再生の「場」を形成するため、数々の生体組織代替材料、免疫隔離膜、人工細胞外基質、成長因子徐放システムの開発などの組織工学研究④自家間葉系幹細胞を用いた骨再生治療などの臨床応用研究があります。

本研究所の特色は、基礎医学・基礎生物学の知見を踏まえ、工学-再生医療、幹細胞医学-再生医療の明確なベクトルを持った研究を展開し、基礎研究から再生医療の実現への医学・工学・理学出身者による学際的、融合的研究を進めていることです。

教育

教育面では、再生医学、再生医学の高度な研究を通じた教育により、再生医学の研究者、医療従事者、また新たな医療産業の担い手となる人材の育成を行うことを理念としています。

前述のように本研究所では、医学・工学・理学出身者による学際的、融合的研究を進めていることに関連して、大学院医学研究科、工学研究科及び理学研究科の協力講座として大学院生の教育を行っており、医学・工学・理学の内の1つに高い専門性をもち、且つ、それら3つの領域を全般的に理解し、広い視野で研究・開発を遂行できる研究者・技術者を養成することを教育目標に掲げています。

博士後期課程2年
竹本 直敏さん
(工学研究科・高分子化学専攻)



“高度な専門性”と“強力な俯瞰力”、この言葉に魅力を感じませんか？

再生医科学研究所(以下、「再生研」)では、常に世界最先端の研究環境(例えば、ノーベル賞の受賞により再び脚光を浴びるiPS細胞も、その樹立は再生研で行われました。)において、“自由な発想”で研究をすることができ、それにより得られる研究者としての喜びは、その苦労と比較して十分おつりが返ってくるのでは、と私には感じられます。

また、再生研では学際的・融合的研究が盛んであり、他分野の先生方の御指導が得られます。このような交流は、(再生研にいると当然過ぎて、もはや“普通”にすら感じてしまいがちですが)多くの知識が得られ、また、確かな技術を修得することができ、さらに、きちんと互いの視点を意識することで、物事を一方方向ではなく、多面的に捉える俯瞰力を鍛えるのに役立ちます。

目指す姿は、上述したような“高度な専門性”と“強力な俯瞰力”を擁する研究者であり、知財も分かる再生医工学のリーダーです。少し自慢ですが、私は2010年弁理士試験に合格しました。しかし私にとって、これはまだほんの序章に過ぎないと考えています。

研究所・教育研究施設

入学試験情報

エネルギー理工学研究所

INSTITUTE OF
ADVANCED ENERGY



<http://www.iae.kyoto-u.ac.jp/>

研究

エネルギー理工学研究所は、エネルギーの生成、変換及び利用の高度化に関する研究を行うとともに、全国の大学その他の研究機関研究者の共同利用に供することを目的とし、現代社会における最大の課題のひとつであるエネルギー問題の解決を目指した研究を行っています。在籍する教員・研究者の学術基盤は、電気、材料、原子力、光、化学、生物等、多岐にわたっています。これらの教員・研究者の連携により、異なる研究領域を有機的に融合・連携させた先進的なエネルギー研究、特に、社会的受容性の高い新規エネルギー源及びエネルギー有効利用システムの実現を目指す新たなエネルギー理工学の研究領域の開拓を進めています。現在は、重点複合領域研究として、「先進プラズマ・量子エネルギー」と「光・エネルギーナノサイエンス」を推進しています。また、「ゼロエミッションエネルギー研究拠点」として共同利用・共同研究を進め、国内外の研究者の共同利用・共同研究に、本研究所の特徴ある大型研究設備や独自に開発・整備した装置群が活用されています。

教育

本研究所の全研究分野は、エネルギー科学研究科の協力講座として大学院教育に参画しており、毎年70-100名の学生が本研究所で指導を受けています。特に、多くの博士後期課程学生を擁し、中でも外国人学生の割合が高く、国際的に開かれた研究所となっています。これまで、日本、韓国、中国による JSPS 「アジア研究教育拠点事業：先進エネルギー科学」をはじめとする国際交流事業、GCOE プログラム「地球温暖化時代のエネルギー科学拠点」や、多くの国際・国内協力事業を活用した大学院生教育を進めてきました。外国での研究活動参加や国際集会・会議への参加の機会が大学院学生にも多く与えられています。また、研究所の特徴的な最先端大型装置と先端的研究に魅力を感じることを、本研究所への配属希望の理由としてあげる学生も多くいます。優れた研究設備群と国際的な研究環境を活用して、世界で活躍できる研究者と高度な専門能力を持つ人材の育成に努めています。

博士後期課程 1年

小澤 大知さん
(エネルギー科学研究科・
エネルギー応用科学専攻)



カーボンナノチューブやグラフェン量子ドットなどのナノカーボン材料の新しい光学的性質を明らかにするために研究を行っています。中でもグラフェンは、2010年に Geim 氏、Novoselov 氏がノーベル賞を受賞しているように、世界の注目を集め、今まさに旬な研究対象と言えます。そんなホットな素材を舞台に、世界の研究者に追いつけ追い越せの研究競争を繰り広げられるのは、なんてエキサイティングな経験なのでしょう! 研究では、自分なりに工夫しカスタマイズした装置も使います。また、得られた実験結果を理解し、新しい物理的な知見を得るために、他の大学院生や研究者と白熱した議論を繰り返すのも研究の醍醐味だと感じています。

大学院というと、中にはモトリアムのように捉える人もいるかもしれませんが、それだけでは物足りないように思います。大学院という学部よりも一つ上のステージで、優秀な人たちに囲まれて自身の能力を高める、そんな有意義な大学院生活を送りたいと思っています。

生存圏研究所

RESEARCH INSTITUTE FOR
SUSTAINABLE HUMANOSPHERE



<http://www.rish.kyoto-u.ac.jp/>

研究

生存圏研究所は2004年4月に設立された新しい研究所です。その目的は人間生活圏、森林圏、大気圏、宇宙空間圏を人類の「生存圏」として組織的・包括的に捉え、それらの診断・解析を行うと同時に開拓・創成する先進的技術開発を促進し、総合科学としての「生存圏科学」を確立することにあります。これを効率よく遂行するため、「環境計測・地球再生」「太陽エネルギー変換・利用」「宇宙環境・利用」「循環型資源・材料開発」という4つのミッションを定めて、分野横断的な研究を推進しています。また萌芽的研究の発掘にも力を入れています。当研究所は、2010年度からは「生存圏科学の共同利用・共同研究拠点」としての活動を開始しました。研究施設・設備の全国・国際共同利用や、生存圏科学のデータベース構築とデータ配布、それらを活用した国際共同研究を推進しています。

教育

生存圏研究所は、農学、工学、情報学、理学と広範な研究分野の背景を持った教員による分野横断的な学際教育を通して、持続的社会的構築に深く関わる生存圏の科学を担う多彩な人材育成に取り組めます。また全国・国際共同利用に供される最先端の研究設備・データベースを利用した研究に接することを通して、総合的な知識と俯瞰的かつ国際的な視野をもって生存圏の科学の発展に寄与する研究・教育者を育成します。協力講座として参加する研究科は、理学研究科、工学研究科、農学研究科、情報学研究科です。また地球環境学堂の協働講座および生命科学研究科の研究指導委嘱講座にもなっています。これらの幅広い研究分野から集まる大学院生は70～90名に達します。

博士後期課程 1年

芦田 康将さん
(工学研究科・電気工学専攻)



私の研究室では「宇宙を知り、宇宙を利用する」というテーマのもと、人間が宇宙へ進出していくために必要な技術について様々な側面から研究が行われています。特に私は磁気プラズマセイルと呼ばれる宇宙推進システムの研究を行っており、国内でも有数の性能を持つ生存圏研究所のスーパーコンピュータ KDK システムのおかげで、コンピュータ上で現実に近い宇宙環境を再現して、推進システムの性能を調査することができています。そして将来的には、木星などの外惑星や太陽系外の探査に役に立てられると考えています。

また、本研究室とともに生存圏科学計算実験分野、生存圏電波応用分野の3研究室はスペースグループとよばれており、宇宙工学に関する知識を共有し、多くの学生が共に研究に励んでいます。JAXA (宇宙航空研究開発機構) や他大学との共同研究、国内外での学会発表にも積極的に取り組んでいます。

防災研究所

DISASTER PREVENTION RESEARCH INSTITUTE

<http://www.dpri.kyoto-u.ac.jp/>



研究

防災研究所は、自然科学を中心とした災害学理の追求と、文理融合した防災学の構築に関する総合的な研究を存立理念としています。地球規模で起こる様々な課題に対して、理学、工学、社会科学等にまたがる基礎的研究を展開するとともに、防災に対する社会のニーズに応える実践的なプロジェクト研究を、学際融合的な研究組織によって実施してきています。最近の主な研究内容は以下のとおりです。

- (1) 地球規模での気候、水循環、社会変動による環境災害に関する研究
- (2) 地表変動災害の予測と対策に関する研究
- (3) 巨大地震と火山噴火の発生予測と災害軽減に関する研究
- (4) 都市の災害脆弱性診断と都市生活空間の再生技術・戦略に関する研究
- (5) 防災情報の作成・伝達とその総合化に向けての新技術の開発

2010年からは「自然災害に関する総合防災学の共同利用・共同研究拠点」として国内外の研究者との新たな共同研究の体制をスタートさせています。

教育

防災研究所は大学院理学研究科、工学研究科、および情報学研究科の協力講座として教育組織を構成しており、大学院生は3研究科あわせて約200名に上ります。大学院教育において先端的かつ学際的な研究を教育に結びつけてきています。

国際化の進展のなか、2009年度から防災研究所を中核部局として、京都大学グローバルCOEプログラム「極端気象と適応社会の生存科学」を実施し、極端気象による悪影響や災害から人類、生態系、生存環境を守る実践科学の知の体系の構築を進めています。「教育ユニット」組織により、理工融合・文理融合の大学院連携プログラムを実践します。

さらに2011年度からは、博士課程教育リーディングプログラム「グローバル生存学大学院連携プログラム」、大学の世界展開力強化事業「強靱な国づくりを担う国際人育成のための中核拠点の形成」にも参画し、次世代を担う高度な人材の育成に務めています。

博士後期課程2年
小槻 峻司さん
(工学研究科・都市社会工学専攻)



近年の急激な経済発展・人口増加に伴い、貯水池や灌漑に代表される人間活動が、陸域水循環に与える影響も大きくなっています。私の研究では、人間活動を考慮した全球水資源モデルの開発に取り組んでいます。モデルを用いて河川流量や農業水需要を診断すると共に、将来の気候データを用いて、気候変動が陸域水循環に与える影響を評価しています。また、広域モデルの利点を活かし、自然災害にも対応しています。2011年のタイ洪水では、JICAの洪水対応プロジェクトに参加し、水収支解析を通じて流域特徴の理解に貢献してきました。

防災には、理学的な自然科学追求に限らず、社会背景の理解も求められます。私自身も、アジアやアフリカの大陸河川に赴き、河川管理や住民生活を見る機会を頂いてきました。自らの視野を広げるべく、現地研究者と歴史・宗教・政治の議論も積極的に行っています。今後も、“Noblesse Oblige”の気概を持って研究に取り組みたいと思います。

基礎物理学研究所

YUKAWA INSTITUTE FOR THEORETICAL PHYSICS

<http://www.yukawa.kyoto-u.ac.jp/>



研究

素粒子論では、自然界の最も基本的な粒子やその間に働く4つの力を研究しています。強い力、弱い力、電磁気力を統一するゲージ理論が確立されつつあります。重力の量子論としては、素粒子を一次元的な紐とみなす超弦理論による研究が盛んです。原子核理論では、強い力を担うハドロンとその集まりである核子や原子核の構造・性質を研究しています。統計・固体物理学では、巨視的物質の持つ様々な興味ある性質(超伝導、超流動など)を基本的な力と、多数の粒子の効果から説明することが目的です。非平衡開放系での物質の運動状態や相構造の解明も重要な課題です。宇宙・天体物理学では、銀河や宇宙スケールの現象を、一般相対論と素粒子論に基づいて説明することを目指します。宇宙の創成、ブラックホールの物理なども大きな課題です。

本研究所では、非常勤研究員等を積極的に受け入れています。また、多くの外国人研究者が長期・短期に訪れ、年間100を超える研究所セミナーの約半数は外国人研究者によるもので、国際的センターの役割を果たしています。

教育

基礎物理学研究所は、大学院理学研究科物理学・宇宙物理学専攻の協力講座として、大学院教育を担っており、理論物理学の四つの基礎的諸分野である素粒子論、原子核理論、統計・固体物理学、宇宙・天体物理学の大学院生(修士・博士後期課程)を毎年十数名受入れています。この四つの学問分野は、扱う対象の特徴的な大きさの尺度に対応しており、極微の世界(素粒子論)、原子の中心にある原子核程度のもの(原子核理論)、日常生活で遭遇する様々な物質(統計・固体物理学)、銀河や銀河団から宇宙そのもの(宇宙・天体物理学)です。23人の教師陣が基礎的な講義から最先端の話題を含めた演習まで幅広いメニューを用意しています。外国人客員教授や、国内外の第一線研究者達による集中講義も大きな魅力です。

高柳 匡教授
(理学研究科・物理学・宇宙物理学専攻・素粒子論)



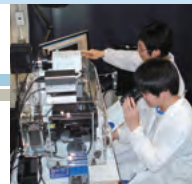
自然界に働く力には、電磁気力、弱い力、強い力と重力の4つがあります。物質や宇宙の最小単位を解明し、ミクロなスケールでも成り立つ究極の物理法則を探るのが素粒子論です。私が研究している超弦理論は、4つの力を矛盾なく統一的に説明する現在ただ一つの理論です。

超弦理論の最近の研究で、4つの力に対する考え方が大きく変わりました。大雑把に言うと、重力とそれ以外の力は従来全く別のものと考えてきましたが、実は同じものを別の見方をしていると考えるのです。この斬新な見方のおかげで、超弦理論の最近の研究では、物性物理、統計物理、量子情報理論などの他分野との深い関わり合いが増してきています。例えば、私は、量子エンタングルメントを用いて重力理論を構築する分野の開拓を行っています。

当研究所では、国内外からのトップレベルの研究者と交流し、他分野の最前線の研究に触れる機会に大いに恵まれています。大学院生には、視野を広く持ち、我が道を進めてほしいと思っています。

ウイルス研究所

INSTITUTE FOR
VIRUS RESEARCH



<http://www.virus.kyoto-u.ac.jp/>

研究

ウイルス研究所は1956年に設立されて以来、病気の原因としてのウイルスの研究とともに、ウイルス研究の基盤として、生命の謎を解き明かす研究に携わってきました。その過程で、我が国の分子生物学研究に中心的な役割を果たし、また新たなウイルスを発見するなど、基礎から応用研究に至るさまざまな貢献をしてきました。

本研究所は「ウイルスなどの感染症による脅威を取り除き、安心した社会の構築に寄与する」「ウイルスの研究をさらに深め細胞および個体レベルの生命現象を理解する」「免疫・神経系などの高次生命現象を理解し、ウイルス疾患を明らかにし、かつ予防する」等を目的とした研究を行っています。

教育

ウイルス研究所は、基礎生物学から医学にわたる多様な分野の研究者が在籍して研究・交流をしており、大学院教育においても5つの研究科(医学研究科、生命科学研究科、理学研究科、薬学研究科、人間・環境学研究科)を通じて多数の学生を受入れています。当研究所に所属する大学院生は学術交流会(所内行事)や国際学生セミナー(生命科学研究科との共催)などの行事を通して様々な異分野の研究に接する機会があります。

さらに、平成22年度からは、「ウイルス感染症・生命科学先端融合的共同研究拠点」として共同利用・共同研究拠点となりました。当研究所はこのような非常にユニークな研究環境を生かして次代を担う世界トップレベルの研究者を育ててきました。今後とも、異分野交流を活発に進めることによって、研究・教育に大きな貢献をしていきたいと考えています。

本田 知之助教
(生命科学研究科・
高次生命科学専攻・
生体動態制御学)



ウイルス研究所では、ウイルス学を中心として、免疫学や発生物学などの多岐にわたる分野で質の高い研究を行っています。研究所の充実したスタッフ陣による丁寧な指導のもと、学生さん達は着実に研究能力を身につけています。さらに、所内で行われている最先端の研究についてのセミナーや他大学の先生によるセミナーが定期的開催されており、様々な分野の最先端の研究を勉強できます。

研究者に必要なものは、実験技術と科学的思考、そして人脈です。実験技術は日々の研究活動で自然に身に付きますが、科学的思考や人脈を得るには、多くの人との交流が大事です。ウイルス研究所では、新入所者歓迎会やソフトボール大会など多くの交流の場が用意されています。ウイルス研究所の魅力である「研究室間の交流の場が豊富であること」は、まさに所内の人との良質な交流を促し、研究者として、さらには一人の人間としての成長を助けてくれています。

経済研究所

INSTITUTE OF
ECONOMIC RESEARCH



<http://www.kier.kyoto-u.ac.jp/>

研究

経済研究所は、1962年創立以来、理論経済学および応用・実証研究の両面において、先端的な経済学研究に携わってきました。当研究所は、2010年度から「複雑系経済学」と「経済戦略と組織」という中心テーマをかかげて、基礎研究に力点をおく国際的共同研究活動を展開しています。

研究テーマの柱の一つをなす「複雑系」という考え方は1960年代から自然科学や工学で発展し、物の見方を一新させた分析手法です。当研究所は、この手法を世界に先駆けて取り入れ、経済学研究を先導してきました。

もう一つのキーワード「経済戦略」は、多くの日本人が戦略的思考を苦手とし、我が国の発展を阻んでいるという問題意識の上に成り立っています。日本人が本当の意味での戦略的思考法を身につけ、組織設計を行える社会を形成しなくてはなりません。「経済戦略と組織」というテーマは、そのための基礎づくりを目指したものです。現在、当研究所はこうした研究方法から経済危機や災害復興の経済分析に挑戦しています。

基礎研究は現実の経済とは大きな隔たりがあると感じる方もいるかもしれませんが、欧米では、最先端の経済学研究が実生活にどんどん取り入れられています。私たちは基礎研究こそが、経済社会を根本から変革していく近道と考えています。

教育

経済研究所は大学院生・若手研究者などの教育にも積極的に関わり、多くの一流研究者を生んできました。当研究所の教員は、大学院経済学研究科の教員として、大学院生の教育に当たるとともに、日本学術振興会特別研究員、グローバルCOE研究員、招へい外国人学者等として内外の若手研究者を受け入れています。多くは、1、2年の研さんを経たのち、主要大学の教員として巣立っており、研究者の養成機関としても当研究所は高い評価を受けています。また、2003年度からは21世紀COEプログラムの拠点として、さらに、2008年度からは、慶應義塾大学・大阪大学と連携して、グローバルCOE教育研究拠点として、大学院生・若手研究者の育成や研究活動に力を入れています。

博士後期課程2年
ゴルシコフ ビクトルさん
(経済学研究科・経済学専攻)



学生時代から世界経済の動きに関心を持ち、経済システムの比較研究に携わりたいことを望んでいました。ロシアの大学(国際関係学部)を卒業し、日本への留学が決まり、世界的に著名な経済学研究機関である京都大学経済研究所を選択しました。現在国際経済学・比較経済システム論の視点から銀行の海外進出に関する実証研究を行っています。

経済研究所には世界的なレベルで研究を行う教授陣が結集しており、海外との交流も盛んに行われています。先生は直接の研究サポートだけでなく、数多くの国際シンポジウム、研究会、その他学術交流などを通じて院生・若手研究者の育成に力を入れており、グローバル人材の育成に役立っています。院生は最先端の研究プロジェクトに参加する機会を与えられ、所内には「先生と学生」の関係を越えた「研究者同士の交流」という雰囲気があります。私自身は将来、研究所での経験を活かして、教育・研究職に就きたいと考えています。

数理解析研究所

RESEARCH INSTITUTE FOR
MATHEMATICAL SCIENCES



<http://www.kurims.kyoto-u.ac.jp/>

研究

数学・数理解析の基礎的研究を推進することが本研究所の目的です。このため、所員による自由な発想と思考に基づく研究活動を活発に推進することは勿論ですが、全国の数学・数理解析研究者のための共同利用・共同研究拠点の事業を実施するとともに、国際研究拠点として国際共同研究を推進しています。毎年70件以上の研究集会等を開催し、300人以上の海外研究者が来訪しています。平成20年度より文部科学省グローバルCOEの1つに選ばれ、平成22年度からは数学・数理解析の先端的共同利用・共同研究拠点として新たな事業を展開しており、本研究所は国内的にも国際的にも卓越した研究拠点として中心的な役割を果たしています。

本研究所の取り組み研究分野は、純粋数学から応用数学、数理物理学、そしてコンピュータ・サイエンスに及んでおり、基礎から応用まで幅広く、相互に有機的な関連をもち、その相互作用により新しい研究領域ならびに研究成果が生み出されています。

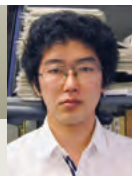
教育

本研究所は、大学院理学研究科、数学・数理解析専攻、数理解析系として、学生入学定員修士課程10名、博士後期課程10名を対象に、数学・数理解析の進歩を担う独創的な研究者の養成を目的とした教育を行っています。担当教員が、その研究分野に関して開講する授業（講義およびセミナー研究）によって、少人数指導で教育を行うのが、本研究所の教育の特色です。

また、学生が研究所で開催される研究集会に参加し、来訪研究者と交流を持ち、最先端の研究に接することができることも、大きな利点となっています。その他に、国内外の若手研究者（博士の学位を取得した者）を、研究員（グローバルCOE、研究機関）や日本学術振興会の特別研究員として受け入れています。

これらの若手研究者は、所員や来訪研究者との研究交流を行ったのち、各大学の教員として巣立っており、本研究所は研究者養成機関としての役割を担っています。

博士後期課程2年
藤田 健人さん
(理学研究科・
数学・数理解析専攻)



数理解析研究所では、代数学・幾何学・解析学・応用数学等といった様々な分野が広くそして深く研究されています。年間を通して様々な研究集会が開催され、自分の専門分野以外の数学についても多くの学術的刺激を得ることができます。また、数理解析研究所図書室の豊富な蔵書・数学雑誌を利用することで、多くの文献を調べることができます。私の研究分野は代数幾何学と呼ばれるもので、その研究対象は、多項式からなる連立方程式の解集合で定義されるような図形（代数多様体）です。中でも、私が興味を持っているのは、ファノ多様体と呼ばれるもので、それは極小モデル理論の観点からも重要な代数多様体です。また、2012年の冬から春にかけての4か月間、GCOEの援助で米国プリンストン大学に研究指導委託という形で留学し、海外でも大変充実した研究生活を送ることができました。このような優れた環境下で研究に勤しむことができることは大変魅力的なことです。

支援について

研究科の紹介

原子炉実験所

RESEARCH FOR
REACTOR INSTITUTE



<http://www.rri.kyoto-u.ac.jp/>

研究

原子炉実験所は、昭和38年の設立以来、全国大学等の共同利用研究者に対して、大学の持つ原子力施設としては国内最大の研究用原子炉（KUR）を中心に、臨界集合体実験装置（KUCA）やコバルト60ガンマ線照射装置などを提供（平成22年度からは、共同利用・共同研究拠点として事業を開始）しています。年間延べ数千人の研究者や学生などが来所しており、理学、工学、農学、医学などの多方面にわたる研究が行われています。

また今日、原子力利用の各分野において大学の果たす役割への期待が益々高まっており、本実験所が培ってきた共同利用研究の実績の評価に基づき、極めて大きな期待が寄せられています。

本実験所では、このような期待に応えるべく、KURなどの諸施設を有効に利用した核エネルギー、放射線・粒子線を用いた特徴的研究を展開しております。さらに、本実験所では固定磁場強集束型（FFAG）加速器をKUCAと結合させた加速器駆動未臨界システムの基礎研究を世界に先駆けて開始するとともに、世界を牽引

するべく、ホウ素中性子捕捉療法（BNCT）によるがん治療の基礎・応用研究を進展させております。

教育

原子炉実験所の教員は、研究分野として工学研究科、理学研究科、農学研究科、医学研究科、エネルギー科学研究科の協力講座を担当して、大学院の講義や研究指導を行っております。また、全学共通科目をも開講して京都大学の学部学生の教育にも貢献しております。この他、KUCAを用いて全国12大学の原子力工学系大学院生（京都大学学部学生を含む）を対象に1週間の実験教育コースを毎年数回行っており、かつ平成15年から韓国6大学、平成18年からスウェーデン1大学の学生にも実施しております。原子力人材育成が世界的にも重要視されている今日、本実験所はその一翼を担っており、国内外の原子力分野の人材育成に大きく寄与しています。

瀬戸 誠教授
(理学研究科・物理学・
宇宙物理学専攻・核放射物理学分野)



これまで原子核の性質を調べるための研究は数多くありました。しかし、そこから先に進んで原子核（同位体）をプローブとして用いることで、これまで困難であった新しい測定を実現することが出来ます。原子核をプローブとして用いると、見たい部分だけをオングストローム程度の原子分解能で測定出来るようになります。現在、表面などの特殊な場合を除けば、このような測定を行うことは他の方法では困難です。また、プローブとしては、“見たい情報に攪乱を与えないこと”が重要ですが、物質の性質を決める電子状態を原子核を通して測定するため、原子核は与える影響を極めて小さく出来る優れたプローブです。京都大学原子炉実験所は、中性子線、電子線、 γ 線等を存分に利用出来る研究所です。私はここで、メスbauer分光法という原子核をプローブとした研究を行っています。学生の皆さんとは、この恵まれた環境を活かして、自由で独創的な誰も考えつかなかったような原子核をプローブとした新しい研究を目指して行きたいと思っています。

研究所・教育研究施設

入学試験情報

霊長類研究所

PRIMATE RESEARCH INSTITUTE



<http://www.pri.kyoto-u.ac.jp/>

研究

霊長類研究所は、ヒトを含む霊長類に関する総合的研究をおこなうことを目的に、全国の研究者の共同利用研究所として京都大学に附置され、1967年に愛知県犬山市に設立されました。現在、4つの研究部門(10分野)、および2つの附属研究施設があります。人間の本性とその進化的基盤を明らかにするため、霊長類の多様な種を対象に、ゲノムから生態まで幅広い視点から学際的研究をおこなっています。京都大学の伝統であるフィールドワークだけでなく、実験室での研究もおこなわれていて、共同利用・共同研究拠点として国内外の研究者が利用できる研究体制を整えています。

教育

霊長類研究所は、京都大学大学院理学研究科生物科学専攻の「霊長類学・野生動物学系」として、大学院教育をおこなっており、大学院を有する国内唯一の霊長類学専門の研究教育機関です。ヒトを含む霊長類に関する総合的研究を継続的に推進・発展させるためには優れた若手研

究者の養成が不可欠ですが、その教育目標は以下のような特色をもっています。

1. 修士課程から博士後期課程まで、広い視野に立った教育を志している。良好な研究環境を保ち、長期的な展望に立った研究の遂行を可能にする。多様な若い人材を受け入れることは研究所の活性化にもなり、留学生や有職者を含む多様な人材の博士編入にも門戸を開いている。
2. 講義や実習を充実して、文系・理系を問わず霊長類学全般に関する基礎知識を深め、体系的な学識を身につけてもらう。
3. セミナーや研究会あるいは学際的な共同研究を通じて、異なる専門領域の研究に接する機会を数多く提供し、専攻した学問領域だけに偏らない広い視野を育成する。
4. 若手研究者を海外に派遣する ITP-HOPE プロジェクトの資金援助により、海外調査や国際共同研究への参加も積極的に推進している。2009年には国際共同先端研究センター(CICASP)が発足し、国際共同研究と英語による教育の充実を推進している。

博士後期課程1年
佐藤 奈奈さん
(理学研究科・生物科学専攻)



私は動物の養育行動に興味があり、その生物学的な基盤を調べるために研究を行っています。現在は、乳児の物理的な特徴を持つ機能を明らかにするため、ニホンザルを対象に実験しています。霊長類研究所には、17種の霊長類が飼育されているため、様々な種を対象とした実験が可能です。また、実験室、屋外の放飼場、国内外のフィールドまで多様な場所で研究を行うことができます。私の研究は動物の持つ普遍性に着目しているため、対象種以外も使用した種横断的な実験も行っていますが、それも霊長類研究所ならではの醍醐味だと思います。

また、霊長類研究所では、幅広い分野の研究が行われているため、心理・生態・形態などそれぞれの専門家と分野を超えたディスカッションを行うことが可能です。海外調査や国際共同研究も積極的に推進しているので、やる気と興味に応じて国外の研究者と交流し共同研究を行うこともできます。充実した設備と環境のもと、自分の研究に専念できる、霊長類研究所は非常に魅力的な研究施設です。

東南アジア研究所

CENTER FOR SOUTHEAST ASIAN STUDIES



<http://www.cseas.kyoto-u.ac.jp/>

研究

東南アジア研究所には、21人の専任教員がおります。その専門は文理の8分野(法、経、文、工、農、理、医)にまたがります。スタッフの多様性と、各々の分野を超えて進めている共同研究の学際性が、研究所の特色であり強みとなっています。一例を紹介すれば、グローバル COE プログラム「生存基盤持続型の発展を目指す地域研究拠点」(杉原薫代表)があります。

このプログラムは、アジア・アフリカ地域の持続的発展に関する学際的研究を、グローバルで長期的な視野から多面的に行うために、2007年度から2011年度まで行いました。生存圏研究所などが進める「サステナビリティ学」の専門家とともに、先端の科学技術や知識を、伝統的な地域研究を支えてきた生態学、政治学、経済学、社会学、人類学、歴史学、医学などの知識と融合させることによって、革新的で実践的な地域研究を推進し、同時にその専門家や科学者の養成を行い、成果を全6巻の『講座・生存基盤論』(京都大学出版会2012)として刊行しました。この成果は、2011年度からスタートした東南アジア研究所特別経費プロジェクト「ライフとグリーンを基軸とする持続型社会発展研究のアジア展開—東アジ

ア共同体構想を支える理念と人的ネットワークの強化—」にも引き継がれています。

また、毎年、半期に6名ずつの外国人研究員をお招きし、共同研究を進めることを通じて、東南アジア研究の国際共同研究拠点として大きな役割を果たしています。

教育

東南アジア地域研究専攻の総合地域論講座を、研究所の8人のスタッフで担当しています。各自の専門は以下のように多彩です。清水(文化人類学)、水野(経済発展論)、藤田(農業経済学)、小泉(歴史学)、石川(社会人類学)、ハウ(文化研究)、甲山(水文・気象学)、三重野(経済学)。そのほか、速水(社会人類学)と岡本(政治学)が地域変動論講座、西瀨(病原細菌学)と安藤(熱帯農学)が生態環境論講座、松林(フィールド医学、老年医学)と河野(自然資源管理)が持続型生存基盤論講座の一員です。また、松林と西瀨が、医学部・医学研究科においても学部生・大学院生の指導をしています。研究所スタッフの多様な研究関心と方法論が、院生へのさまざまな刺激と示唆、助言と指導に役立っています。

一貫制博士課程1年
梶田 諒介さん
(アジア・アフリカ地域研究研究科
東南アジア地域研究専攻)

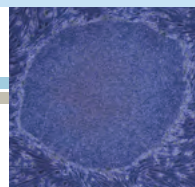


私は、インドネシアにおける人々の防災意識に関する研究をしています。研究を進めていく上で、過去に津波の被害を受けたインドネシアのアチェやパダンでフィールドワークを行っています。現地での生活を通して、調査活動を行い、様々な経験を築いていきたいと考えています。

東南アジア研究所は異なる専門分野、異なる地域で研究をされている先生方が多くおられ、様々な視点から研究のアドバイスを頂くことができます。研究所には数多くの海外の研究者や留学生が様々な研究をそれぞれの視点からされており、国の壁を超えてグローバルな議論を深めることができます。それぞれの研究は多様ですが、研究方法としてフィールドワークを重視しており、地域を理解するということを大切にしています。また、学生のフィールドワークを支援する体制も整っています。地域研究を行う学生にとって、このような多様で国際的な研究をしている研究所で、自分の研究を行えることはとても魅力的です。

iPS 細胞研究所 CENTER FOR IPS CELL RESEARCH AND APPLICATION

<http://www.cira.kyoto-u.ac.jp/j/>



研究

iPS 細胞研究所 (CiRA = サイラ) は、2010 年 4 月に設立され、初代所長には、世界で初めて iPS 細胞を樹立することに成功した山中伸弥教授が就任しました。前身は、2008 年 1 月に物質一細胞統合システム拠点 (iCeMS) 内に組織された iPS 細胞研究センターです。iPS 細胞研究所の主任研究者は初期化機構研究部門、増殖分化機構研究部門、臨床応用部門、基盤技術研究部門に分かれて研究活動を行っています。主任研究者の半数近くは 30 代で、若い研究者の豊かで自由な発想を重視しています。

2010 年 2 月に竣工した研究棟 (地上 5 階、地下 1 階)には、動物実験施設や細胞調製施設 (F i T : Facility for iPS Cell Therapy) が設置されています。これにより、iPS 細胞の基礎研究から再生医療を目指した前臨床および臨床応用研究までシームレスに実施できる体制が整いました。また、研究エリアではオープンラボ形式を採用しており、研究者間のスムーズな情報・意見交換が期待できます。さらに、研究者が研究に専念できるように、独自に知的財産や契約などを管理するサポートチームも組織してい

ます。

iPS 細胞研究に特化した世界でも先駆的な研究機関として、iPS 細胞研究所は難病や外傷で苦しんでいる世界中の大勢の人々に役立つ新しい治療法を開発するために、iPS 細胞作製技術を用いて創薬や再生医療を実現することを目標としています。

教育

iPS 細胞研究所では、医学研究科の一部として、初期化機構研究部門初期化制御学分野、増殖分化機構研究部門分化誘導研究分野、臨床応用研究部門疾患再現研究分野等の 9 分野で大学院教育を実施しています。また、日本学術振興会等の外部資金を活用して若手研究者を受け入れています。再生医科学研究所、iCeMS、医学研究科、医学部附属病院と密接に連携しながら、共同研究の奨励と若手研究者の交流と育成に努めています。

豊田 太郎 特定拠点助教
(iPS 細胞研究所・増殖分化機構研究部門)



ヒトの体は多種多様な細胞から成り立っていますが、それらがどのようにして構成・維持されているのかは、まだまだ多くの未解明点があります。iPS 細胞は、一度運命の決まった体細胞に再び「多能性」をもたせた細胞で、ヒトの体の仕組みを理解する上で非常に興味深い細胞といえます。私が所属する研究グループでは、全身の代謝調節に深い関わりのある腎臓、肝臓、脾臓を標的臓器として、試験管内で iPS 細胞からこれらの細胞を高効率に分化誘導する方法の確立とその臨床応用を目指した研究を行っています。一種類の細胞が、異なる刺激によって全く異なった性質をもった細胞へと分化していく様子は、細胞の多能性・多様性を直接的に実感でき、興味がつきません。最先端設備が整い、オープンラボスタイルによって他の研究室との垣根が低く (文字通り壁がありません)、さまざまな研究背景をもつ研究者とのディスカッションの機会にも恵まれています。このような CiRA の環境で、貴方も研究生活を始めてみませんか？

支援について

研究科の紹介

教育研究施設

■全国共同利用施設	設置目的
学術情報メディアセンター (昭和 44 年 4 月開設)	情報基盤及び情報メディアの高度利用に関する研究開発を行い、教育研究等の高度化を支援するとともに、全国の大学その他の研究機関の研究者等の共同利用に供する。また、情報環境機構の行う業務を支援する。
放射線生物研究センター (昭和 51 年 5 月開設)	放射線の生物への影響に関する基礎的研究を行うとともに、全国の大学その他の研究機関の研究者の共同利用に供する。
生態学研究センター (平成 3 年 4 月開設)	生態学・生物多様性科学に関する研究を行うとともに、全国の大学その他の研究機関の研究者の共同利用に供する。
地域研究統合情報センター (平成 18 年 4 月開設)	地域研究に関する情報資源を統合し相関型地域研究を行うとともに、全国の大学その他の研究機関の研究者の共同利用に供する。
野生動物研究センター (平成 20 年 4 月開設)	野生動物に関する教育研究を行い、地球社会の調和ある共存に貢献するとともに、全国の大学その他の研究機関の研究者の共同利用に供する。
■学内共同教育研究施設	設置目的
高等教育研究開発推進センター (平成 15 年 4 月開設)	高等教育における教授法、教育課程、教育評価等、教授システムに関する実践的研究、ならびに本学の教育活動の改善について、専門的立場から助言および協力を行うとともに、その研究成果に基づき高等教育研究開発推進機構の行う業務を支援する。また、研究成果に基づいて有する教育内容および方法の改善に係る機能について、他の大学の利用に供する。
総合博物館 (平成 9 年 4 月開設)	学術標本資料の収集と収蔵、教育研究支援、研究成果の公開および学術標本資料の解析、学術的評価、情報化等の調査研究および研究資源アーカイブに関する各種資料の体系的な収集・保存・運用・これらに必要な調査研究を行う。
低温物質科学研究センター (平成 14 年 4 月開設)	液体窒素や液体ヘリウムなどの寒剤を安定的に供給し、低温科学の研究や教育を支援する。低温物質科学に関する独自の研究・教育を行うとともに、実験室・研究設備を共同利用に供する。また、環境安全保健機構の行う業務を支援する。
フィールド科学教育研究センター (平成 15 年 4 月開設)	森林生物圏、里域生物圏ならびに沿岸海洋生物圏をつなぐ現場教育とフィールド研究を行うとともに、学内および国内外からの共同利用に供する。
福井謙一記念研究センター (平成 14 年 4 月開設)	ノーベル化学賞を受賞された福井謙一博士の研究理念を継承し、基礎化学並びに関連する科学の諸分野に関する研究を進展させ、学術研究の向上を図る。
こころの未来研究センター (平成 19 年 4 月開設)	心理学、認知科学、脳科学、人文科学等の学際的研究拠点を構築し、人のこころに関する総合的研究を行う。
文化財総合研究センター (平成 20 年 4 月開設)	文化財の調査・保存・活用に関する総合的教育研究を行うとともに、京都大学敷地内の埋蔵文化財についての調査研究及びその保存のため必要な業務を行う。

研究所・教育研究施設

入学試験情報

■物質－細胞統合システム拠点	設 置 目 的
物質－細胞統合システム拠点 (平成 19 年 10 月開設)	物質科学と細胞科学を統合した新たな学際領域の創出を行う。
■その他の学内組織	設 置 目 的
健康科学センター (昭和 41 年 4 月開設)	学生及び職員の健康管理に関する専門的業務を行う。また、環境安全保険機構の行う業務を支援する。
カウンセリングセンター (平成 8 年 4 月開設)	学生等及び職員の修学上、就労上及び適応上の相談及び、セクシャルハラスメント等の防止対策等の研究に基づき、本部の事務組織等に必要の助言等を行う。また、環境安全保健機構の行う業務を支援する。
大学文書館 (平成 12 年 11 月開設)	公文書等の管理に関する法律（平成 21 年法律第 66 号）に基づく特定歴史公文書等その他京都大学の歴史に係る各種の資料の収集、整理、保存、閲覧および調査研究を行う。
宇宙総合学研究ユニット (平成 20 年 4 月開設)	宇宙総合学の構築のための学際的な研究を行う。
アフリカ地域研究資料センター (平成 8 年 4 月開設)	アフリカ地域の学術情報に関する国際学術誌の編集刊行、図書・地理情報・動植物標本・民族資料等の収集・整理・公開、公開研究会および公開シンポジウムの開催、国際学術協定等に基づく研究交流の推進、関連研究機関との情報交換を行う。
女性研究者支援センター (平成 18 年 9 月開設)	研究者の交流、啓発・広報、育児・介護の支援、就労形態に関する調査その他、女性研究者の支援に関する業務を行う。
白眉センター (平成 21 年 9 月開設)	次世代研究者育成支援事業の企画運営を行うとともに、同事業により雇用する教員の受入部局との協議調整その他次世代研究者育成支援事業の円滑な実施に関し必要な事項を処理する。
学際融合教育研究推進センター (平成 22 年 3 月開設)	学際的な教育研究を推進するための支援を行う。

協力講座一覧

各研究所・教育研究施設において大学院学生として教育を受けることを希望される場合は、下記それぞれの協力講座を開講している大学院研究科に問い合わせ（89ページ参照）、受入状況をご確認ください。

研究科名	専攻名	分野・講座名	研究所・施設名			
文学研究科	文献化学専攻 思想化学専攻 歴史化学専攻 行動化学専攻 現代化学専攻		人文科学研究所			
		教育学研究科		教育科学専攻	高等教育開発論	高等教育研究開発推進センター
		経済学研究科		経済学専攻	経済情報解析研究部門	経済研究所
					経済制度研究部門	
					経済戦略研究部門	
ファイナンス研究部門						
附属複雑系経済研究センター						
理学研究科	数学・数理解析専攻	数理解析基礎	数理解析研究所			
		解析数理				
		応用数理				
		計算数理				
	物理学・宇宙物理学専攻		電磁物理学	化学研究所		
			基礎物理学	基礎物理学研究所		
			核物性学	原子炉実験所		
			学際物理・宇宙物理学	低温物質科学研究センター		
	地球惑星科学専攻		環境地球科学	防災研究所		
			応用固体地球物理学			
			応用気象・海洋学	生存圏研究所		
			学際地球惑星科学		総合博物館	

研究科名	専攻名	分野・講座名	研究所・施設名
理学研究科	化学専攻	物質化学	化学研究所
		材料化学	
		情報伝達	
		細胞生物学	ウイルス研究所
		粒子線化学	原子炉実験所
		学際化学	低温物質科学研究センター
	生物科学専攻	細胞情報制御学	原子炉実験所
		生態学	生態学研究センター
		動物分類系統学	フィールド科学教育研究センター
		生体分子情報学	化学研究所
		遺伝子動態調節	ウイルス研究所
		霊長類学	霊長類研究所
		学際生物学	総合博物館
			再生医科学研究所
低温物質科学研究センター			
野生動物研究センター			
医学研究科	医学専攻／医科学専攻	ゲノム維持機構研究	放射線生物研究センター
		クロマチン制御ネットワーク（第一分野）	
		DNA損傷シグナル研究	
		ゲノム動態研究	
		ケミカルバイオロジー	化学研究所
		細胞機能調節学	再生医科学研究所
		生体微細構造学	
		生体機能調節学	
		生体システム制御学	
		生体分子設計学	
		発生分化研究	
		再生増殖制御学	
		再生免疫学	
		組織再生応用	
		器官形成応用	
		臓器再建応用	
		ナノバイオプロセス	
		バイオメカニクス	
		シミュレーション医工学	
		腫瘍ウイルス生物学	ウイルス研究所
		発がん分子機構学	
		腫瘍ウイルス学	
		分子腫瘍ウイルス学	
		免疫細胞学	
		感染防御生物学	
		細胞生物学	
		感染病態学	
		ウイルス感染症学	
		ウイルス病態学	
		粒子線腫瘍学	原子炉実験所
		病原細菌学	東南アジア研究所
		フィールド医学	iPS細胞研究所
		初期化制御学	
		分化誘導研究	
細胞誘導制御学			
理論細胞解析			
幹細胞分化制御学			

RESEARCH INSTITUTES

研究科名	専攻名	分野・講座名	研究所・施設名	
医学研究科	医学専攻/医科学専攻	疾患再現研究	iPS細胞研究所	
		臓器形成誘導		
		幹細胞応用研究		
		神経再生研究		
	社会健康医学系専攻	疫学・予防医療学	健康科学センター	
		発生生物学	物質-細胞統合システム拠点	
		予防医療学	健康科学センター	
薬学研究科	薬科学専攻	ヒトレトロウイルス学講座	ウイルス研究所	
		精密有機合成化学講座	化学研究所	
		生体機能化学講座		
	医薬創成情報科学専攻	統合ゲノミクス	化学研究所	
		分子設計情報		
工学研究科	社会基盤工学専攻	防災工学	防災研究所	
		計算工学	学術情報メディアセンター	
	都市社会学専攻	都市国土管理工学	防災研究所	
		都市環境工学専攻	物質環境工学	環境安全保健機構附属環境科学センター
	原子炉実験所			
	建築学専攻	建築防災工学	防災研究所	
		空間安全工学		
	機械理工学専攻	粒子線物性学	原子炉実験所	
	マイクロエンジニアリング専攻	ナノバイオメカニクス	再生医科学研究所	
	原子核工学専攻	核システム工学	原子炉実験所	
			生存圏研究所	
	電気工学専攻	電波工学	学術情報メディアセンター	
		情報メディア工学		高等教育研究開発推進機構
	物質エネルギー化学専攻	物質変換科学	化学研究所	
			同位体利用化学	原子炉実験所
			融合物質エネルギー化学	化学研究所
	分子工学専攻	分子材料科学	学際融合教育研究推進センター	
			化学研究所	
	高分子化学専攻	高分子設計	化学研究所	
		医用高分子	再生医科学研究所	
合成・生物化学専攻	反応生命化学	学際融合教育研究推進センター		
		福井謙一記念研究センター		
化学工学専攻	環境安全工学	環境安全保健機構附属環境科学センター		
農学研究科	森林科学専攻	森林育成学	フィールド科学教育研究センター	
		森林情報学		
		バイオマス形態情報学	生存圏研究所	
		生物機能材料学		
		循環材料創成学		
		木質構造機能学		
	居住圏環境共生学			
	応用生命科学専攻	分子生体触媒化学	化学研究所	
		分子微生物科学		
		森林圏遺伝子統御学	生存圏研究所	
		森林代謝機能化学		
	木質バイオマス変換化学			
応用生物科学専攻	里海生態保全学	フィールド科学教育研究センター		
地域環境科学専攻	放射線管理学	原子炉実験所		

研究科名	専攻名	分野・講座名	研究所・施設名
人間・環境学研究科	共生人間学専攻	人間社会論講座・社会行動論分野	高等教育研究開発推進センター こころの未来研究センター
		認知・行動科学講座・認知科学分野	こころの未来研究センター
		認知・行動科学講座・行動制御学分野	高等教育研究開発推進機構
		言語科学講座・言語比較論分野	学術情報メディアセンター
		外国語教育論講座・外国語教育論分野	高等教育研究開発推進センター
	共生文明学専攻	文化・地域環境論講座・文化人類学分野	人文科学研究所
		分子・生命環境論講座・分子環境相関論分野	化学研究所
	相関環境学専攻	分子・生命環境論講座・生命環境相関論分野	放射線生物研究センター 放射性同位元素総合センター
		自然環境動態論講座・生物環境動態論分野	ウイルス研究所
		物質相関論講座・物質物性相関論分野	高等教育研究開発推進機構
物質相関論講座・物質機能相関論分野		高等教育研究開発推進機構 放射性同位元素総合センター	
エネルギー社会・環境科学専攻		エネルギー社会論・エネルギー政策学 エネルギー社会論・エネルギー社会教育	原子炉実験所
エネルギー科学研究科	エネルギー基礎科学専攻	基礎プラズマ科学・核融合エネルギー制御	エネルギー理工学研究所
		基礎プラズマ科学・高温プラズマ物性	
		エネルギー物質科学・界面エネルギープロセス	
		エネルギー物質科学・エネルギーナノ工学	
		エネルギー物質科学・エネルギー生物機能化学	
	エネルギー変換科学専攻	エネルギー物質科学・生体エネルギー科学	原子炉実験所
		核エネルギー学・中性子基礎科学	
		核エネルギー学・極限熱輸送	
エネルギー応用科学専攻	エネルギー機能変換・高度エネルギー変換	エネルギー理工学研究所	
	エネルギー機能変換・高品位エネルギー変換		
	エネルギー機能変換・エネルギー機能変換材料		
エネルギー応用科学専攻	高品位エネルギー応用・機能エネルギー変換	エネルギー理工学研究所	
	高品位エネルギー応用・エネルギー材料物理		
	高品位エネルギー応用・光量子エネルギー学		
アジア・アフリカ地域研究研究科	東南アジア地域研究専攻	総合地域論講座	東南アジア研究所
情報学研究科	知能情報学専攻	映像メディア	学術情報メディアセンター
		ネットワークメディア	
		メディアアーカイブ	
		バイオ情報ネットワーク	
	社会情報学専攻	総合防災システム	防災研究所
		巨大災害情報システム	
		危機管理情報システム分野	
	数理工学専攻	情報フルーエンス教育	学術情報メディアセンター
		数理ファイナンス	経済研究所
		システム科学専攻	応用情報学
通信情報システム専攻	リモートセンシング工学	生存圏研究所	
	地球大気計測		
生命科学研究科	統合生命科学専攻	形態形成学講座・ゲノム維持機構学分野	放射線生物研究センター
		形態形成学講座・ナノ生体科学分野	物質-細胞統合システム拠点
		形態形成学講座・神経発生学分野	
		細胞機能動態学講座・細胞情報動態学分野	ウイルス研究所
	細胞機能動態学講座・信号伝達動態学分野		
	高次生命科学専攻	高次生体機能学講座・高次細胞制御学分野	ウイルス研究所
		高次生体機能学講座・生体動態制御学分野	
		高次生体機能学講座・細胞増殖統御学分野	
高次生体機能学講座・高次情報制御学分野		医学部附属病院探索医療センター探索医療開発部	